なとりくまの どうおおだてあと

名取熊野堂大館跡

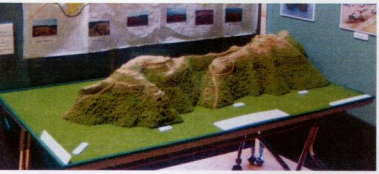
熊野堂大館跡は、中世の山城跡で南郭・中郭・北郭という構成になっています。団地開発に伴い、昭和59年に南郭・中郭、平成3・4年にまたがって北郭が発掘された。

そこには、たくさんの掘立柱建物跡やそれを囲むように土塁や空堀がめぐらされており、たいへん頑丈なつくりでした。出土遺物は、中国からの輸入陶器をはじめ、焼き物で有名な常滑焼・瀬戸焼などや、石臼・硯・香炉・銅鈴などが見つかった。

そのなかで、中郭から出土した7点の中世陶器が市指定になっている。内容は、常滑焼の大がめ・中がめ・擂鉢、古瀬戸焼の瓶・灰釉鉢子・灰釉平茶碗で県内の中世遺跡の出土品のなかでも年代的に古いものが含まれている。

なお、これらの遺物などから鎌倉末～室町初の期間に使っていた館跡だと思われる

Ⅱ-9-①



Ⅱ-9-②

くまの どうおおだてあと

熊野堂大館跡

Ⅱ-9-②

Ⅱ-9-⑤-a

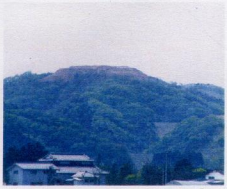
熊野堂大館跡空撮
（地肌が剥きだしになっているのが
中郭・南郭、木の伐採のみが北郭）

Ⅱ-9-⑤-a

Ⅱ-9-⑤-b

北郭発掘状況

Ⅱ-9-⑤-b



Ⅱ-9-⑤-c

北郭の遺景（国道286号から望む）

Ⅱ-9-⑤-c

Ⅱ-9-⑤-e

香炉出土状況(北郭)

Ⅱ-9-⑤-e

Ⅱ-9-⑤-d

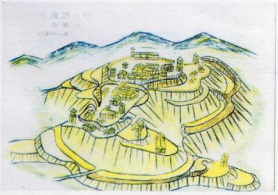
中郭（手前）・南郭（奥）の遺景

Ⅱ-9-⑤-d

Ⅱ-9-⑤-f

北郭西側掘りあげ状況

Ⅱ-9-⑤-f



Ⅱ-9-③